

日本人のプロ第1号としてフランスのアピロン・バイヨンヌ（A B）入りした村田だったが、最初から期待されていたわけではなかった。たまたま同じポジションのスクラムハーフが故障し交代要員として出されることになった。つまり穴埋めだったというのである。それが初出場1分でスクラムサイドをすり抜けてのワントライ。しかも動きが速く周囲への観察も的確で球さばきがうまくパスがめちや速い村田に、チームメイトもサポーターもなんだなんだと刮目していたら、またもやワントライをご披露することになったのだった。「ワター」の愛称はいっぺんにA Bにひろがった。

「バックスに限らずフォワードにしても、みんな足が速いというのが実感でしたね。2部リーグとはいえやはりフランスのシャンパンラグビーはここにあると」

シャンパンの泡のように次から次へと味方の選手が背後から湧き出てボールをつなぎ、敵陣へと突進してゆくのがフランスの持ち味たるシャンパンラグビーだ。ボールをつなごうとしても味方選手がいなければつなぐこともできず敵ディフェンスにつかまるしかないわけだから、足の速い味方が次々サポートしてこそそのシャンパンラグビーなのである。

「体力的な違いはそれほど問題になりませんが、なにより精神的にタフなことですね。それとラグビーを楽しむでいる」

なせ、朝クラブに集合して全員でバスでアウェイへ向かう。相手によっては十数時間かかって到着なんてこともある。そこで試合

シャンパンラグビーの神髄を目の当たりにした。

●むらた・わたる 33歳。小学校1年から福岡でラグビーを始め、東福岡高、専修大、東芝府中とプレーを続け、99年渡仏。来シーズンはヤマハ発動機でのプレーとなる。オフィシャルホームページは、<http://www.wata888.net>。

Ω
OMEGA



文/寺崎 央 撮影/長岡洋幸

をやり試合後の交歓会でビールやワインをしっかりとま飲つてその日夜中になつて帰ってくる、なんてことも珍しくない。かなりガツクリくるスケジュールだが、そんなことは屁とも思わず翌朝は快適に仕事場に向かうタフさがあるのである。そしてそういつたラグビーライフのすべてを楽しんでいるのだ。日本同様プロは一握りしかおらずほとんどが普段仕事を持っているラグーだが、その楽しみ方に村田は感じ入った。